



うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌

第3号

発行日：平成7年3月1日
編集発行：魚津埋没林博物館
印刷：魚津印刷(株)

いい湯だな～!?



ある冬の朝の博物館の池の様子です。たくさんのカモメの仲間がゆっくりと翼を休めています。このとき気温は0℃、池の水温は13℃でした。地下水を汲み上げて入れている池の水温は、真冬でも10℃以上あります。冷え込んだ日には水面から湯気が立って、まるで鳥が温泉に浸かっているように見えます。

ここにやってくるカモメの仲間は、おもにウミネコ、ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメの4種類で、多い日には池とその横の駐車場に100羽ぐらやってきます。

蜃気楼の魅力とは…

学芸員 石須秀知

例年のことだが、3月も半ばになって暖かく晴れた日が多くなると、館には蜃気楼の問い合わせ電話がよくかかってくる。そしてたいていは4月に入ってから、「その年の最初の蜃気楼」が新聞やテレビで報道されると、問い合わせの数はさらに増える。多いときには日に何十本という問い合わせの電話がかかって来るが、その大半は「今日は出そうか」とか「今、出ているか」という内容のものである。電話の対応に半ばうんざりすることもなくはないが、蜃気楼への関心の高さをあらためて認識させられる。

蜃気楼を写真などでもまったく見たことのないという人が抱いているイメージは、実際の蜃気楼からはかけ離れていることが多い。たとえば、はるか離れた見知らぬ土地の風景が映し出されるとか、空中にいろいろなものが走馬灯のように映るなどである。また、蜃気楼の実物は見たことがないが、写真では見たことがあるという人もある。この場合にも、ちょっとした誤解が生じることがある。蜃気楼の写真は、超望遠レンズで撮影したアップのものであることが多い。それを知らずに見ていると、蜃気楼を大きいもののように思い込んでしまうのである。そんなに大きなものでなくとも、ちょっと見上げるくらいのはあるだろうと思ってしまう。ところが実際の蜃気楼は、見かけ上それほど大きなものではない。

蜃気楼は、光が密度の異なる空気の層を通過するときに屈折や反射を起こして、実際にはない虚像が現われる現象である。虚像の現れ方は、実際の風景の上側に現れる場合（魚津の春の蜃気楼）と下側に現れる場合（冬の蜃気楼、浮き島現象、逃げ水など）があり、条件によって虚像の形は違

うが、風景が逆さになったものが基本形である。遠くの風景の上や下に鏡のようなものがあると考えればよい。しかし、いずれの場合も虚像の大きさは肉眼で識別しにくいことが多い。見かけの大きさを言葉で表すのは難しいが、視野に占める角度で1度あるかないかである。人間の全視野はほぼ180度であるから大体の想像はつくであろう。

このように、蜃気楼を実際に見たことのない人がそれぞれ胸に抱くイメージと実際の蜃気楼の間にギャップができてしまい、せっかく蜃気楼に出会ってもあまり喜びを感じないことがある。あくまでも自分のイメージの蜃気楼を追い求めようとする人は、実際に見る蜃気楼は物足りないかもしれない。逆に蜃気楼がどんなものか見極めようという人は、それまでのイメージがどうであれ、実際に目を見た蜃気楼に満足できるであろう。それは人それぞれで、一度本物の蜃気楼を見てそれに魅力を感じるかどうかは自由である。ただ、「蜃気楼を見るまで」と「蜃気楼を見てから」では、蜃気楼の「魅力」の種類が変わると言うことはできるであろう。前者はまだ見ぬもの、自分のイメージへの憧れとも言え、後者はさらなる探求への魅力と言えるかもしれない。この両者のどちらがよいという問題ではなく、どちらも蜃気楼の魅力である。一昨年春、富山湾の向こうに霞んでみえる宝達丘陵の山々を見て、「ああ、きれいな蜃気楼だ」と感動して互いに記念写真を撮っていた夫婦に、「あれは蜃気楼ではありませんよ…」とはついに言えなかった。一時的に感動を壊しても本当のことを教えた方が親切だったか、それともそれは大きなお世話なのか、今考えてもその答えは出ない。



▲新湊方向に現れた蜃気楼（'94年5月21日）



▲新湊方向、実景

シリーズ

埋没林の仲間たち ③

ヤナギ類 Salix sp. 他

普通、「ヤナギ」というと、細長い枝をたらす中国原産のシダレヤナギ（枝垂柳）を思い浮かべる人が多いであろう。シダレヤナギは公園や川の土手などによく植えられ、青々とした枝葉が風にそよいでいる姿が印象深く覚えやすい。そのため、ヤナギといえば枝がたれるものと思い込んでいる人もいる。

しかし単に「ヤナギ」という名前の植物はなく、ヤナギというときには、シダレヤナギを指すこともあればヤナギ属あるいはヤナギ科の植物全般を指すこともある。日本に自生するヤナギの仲間（ヤナギ属）は30種類以上あるが、シダレヤナギのように細長い枝をたらすものはない。

シダレヤナギ以外で一般になじみ深いものとしては、ネコヤナギがあげられるだろう。水辺に普通に生えるネコヤナギは、銀白色の毛が密生した芽が美しく、生け花の材料としてもよく用いられる。生け花に使われるヤナギの仲間にはほかにも



オノエヤナギ



オオバヤナギ

ウンリュウヤナギ（中国原産）やカワヤナギなど何種類かあるようである。

ヤナギの仲間は、河原、荒れ地、湿地などに生える種類が多い。現在の魚津市平野部周辺で見られるヤナギの仲間は10種類前後はあると思われるが、詳しく調べたデータはないので不明である。

オオバヤナギは同じヤナギ科でもヤナギ属ではないが、魚津市と滑川市の境界を流れる早月川に多く生えている。このオオバヤナギは川の上流や山地の沢沿いなどの土地の荒れやすい場所によく生育し、平地には少ない。しかし、早月川では河口までほぼ途切れなく分布している。代表的急流河川の早月川ならではの景観と言えるだろう。

*

魚津埋没林では、1989年の調査でどの地層からもヤナギ属の花粉が多く検出されている。先にも述べたように、ヤナギの仲間は川岸や湿地などに生えるものが多い。埋没林が生育していた頃にはそのような湿地的環境が多かったものと思われる。

この展示物★ここに注目

1号館・倒木

1号館の入口を入ったところに大きな木の幹が1本立っている。直径は1mぐらい、高さは10m近くある。この博物館には、これと、3号館に1本の合計2本の木の幹が保存展示されている。埋没林として発見される木はほとんどが根の部分で、幹の発見例は少ない。

埋没林ができていく過程で、海面の上昇と河川の氾濫によって土砂が堆積していく時期がある。このときにほとんどの木が枯れてしまったと考えられるが、木の根元の方は泥や砂利の下で半ば水浸しのような状態になり空気と遮断されて腐敗しにくくなる。ところが上部の幹は空気中にさらされているため、腐敗が進み、やがてなくなってしまうのである。そのため





埋没林として発見されるものは根株ばかりになるのである。

つまり、幹が埋没林として残るためには、土砂の堆積が起きる前になんらかの理由で倒れ、かつそれが腐りきってしまう前に埋もれてしまわなければならない。ここに展示されている幹は、木の大きさを想像しやすいように立ててあるが、実際には倒れた形で埋まっていたものである。この幹の裏側は半分腐ってなくなってしまうが、全部が腐ってしまう前に土砂が堆積し、保存されたものと考えられる。

このように埋没林から幹が発見される例は少ないが、もし完全に近い状態のものが発見されれば、木の太さや高さがわかるだけでなく、年輪の解析などによって当時の気候変動などが判明するなど、いろいろなデータをえられる可能性がある。

行事報告



▲ 蜃気楼の実験

◀ まなびピアとやま'94

平成6年10月8日 全国生涯学習フェスティバル
まなびピアとやま'94
魚津市コーナー（蜃気楼の体験）
出展（～10月10日）

平成7年1月2日 皇太子ご夫妻ご来館記念写真展
（～1月31日）
2月1日 企画展「富山県の名木・巨木」
（～3月31日）
3月25日 博物館教室 蜃気楼の不思議体験
—実験と観察—

ご利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時（入館は4時30分まで）
- 休館日 12月～3月の月曜日、祝日の翌日、年末年始（4月～11月無休）
- 入館料 ・大人（高校生以上）…500円 ・小中学生…250円
- 交通
 - ・JR北陸本線 } 魚津駅下車（タクシー…5分）
 - ・富山地方鉄道 } 徒歩…15分
 - ・北陸自動車道魚津ICより車10分

特別天然記念物 **魚津埋没林博物館**

〒937 富山県魚津市釈迦堂814 ☎ (0765) 22-1049

